

第3回学校運営協議会記録

1 日時

令和7年2月17日（月） 13:30～15:00

2 場所

本校会議室

3 参加者

（1）学校運営協議会委員 8名

A 委員（学識経験者）	B 委員（教育関係有識者）	→御欠席
C 委員（福祉関係者）	D 委員（PTA関係者）	E 委員（企業関係者）
F 委員（地域関係者）	G 委員（福祉関係者）	H 委員（行政関係者）
I 委員（本校職員）		

（2）本校職員 9名（委員の校長も含）

校長、副校長（小・中・高）、事務長、総括教務主任、学部主事（小・中・高）

4 内容

（1）開会のことば

（2）校長あいさつ

本日は、年度末も見えてきているご多忙の中、学校運営協議会へのご出席、本当に感謝している。また、日ごろより本校の教育活動に御理解、御協力をいただいていることに心から感謝申し上げる。

さて、2月のこの時期に入ると、新年度に向けた動きも出てくる。去る2月7日金曜日には、本校高等部の合格発表があり、新年度の入学予定の生徒が決定した。加えて、就学指導等で、本校への入学並びに編入してくる児童生徒についても、おおよそのところが見えてきているところだ。2月19日に入学説明会があり、新年度に向けた準備が少しづつ進んできているところだ。1年間の短さを実感するとともに、年間の限られた日数の中で展開されている教育活動において、学びの質を維持しながら1年間を乗り切っていく難しさも同時に感じている。

学習活動も本格化して、学校運営協議会スタートから2年目を迎えた令和6年度であるが、大きな事故や怪我もなく、子どもたちの成長を様々な場面で感じながら進めてくることができた。

本日は、今年度の学校経営について振り返り、それぞれのお立場や御経験を基にした御意見を頂戴して、新年度に向けた学校づくりに生かしてまいりたいと思うので、どう

ぞよろしくお願ひいたします。

(3) 協議（議長：A 委員）

ア 令和 6 年度学校運営状況について

I 委員が説明

今年度の学校経営の状況を、大きく 5 つの観点でまとめた。

まず「学びの保障」について、学習指導要領で示されている生きる力の育成を目指して、年間の指導計画並びに児童生徒の実態に即した個別の指導計画とともに学習活動を進めてきた。学校全体で行う大きな行事を、「ひがしの日」として設定して、各学部の児童生徒の発達段階に応じた学年ごとの学習活動に取り組むことを通して、新年度 4 月からスタートした学校生活のペースづくりが、大きく崩れることもなく、子どもたち一人一人が意欲的に学習に取り組む姿が様々な場面で見られた。ICT 機器を活用した学習活動、例えば、アプリケーションを使った学習であるとか、調べ学習、タブレット機能そのものの活用の仕方などの場面も多く見られるようになり、機器の使用に対する興味から関心に意識が移り、その関心度が高まっているように感じている。また、各学部において望ましい学習集団の形成が図られており、例えば小学部の場合は、小さな集団から大きな集団での学習活動や、友達との関係性、学習の場のメリハリをしっかりとつけているなども感じている。中学部については、中 1 から中 3 の縦割りによる学習活動、それぞれの場面に応じたコミュニケーションのあり方、あるいは全体を意識した一人一人の行動、自己有用感の醸成が図られているように感じる。高等部では、一人一人の役割の意識、自己コントロール、コミュニケーションの拡大、そして将来の進路、社会に貢献する意欲や関心の向上というものが見られたように感じている。小 6、中 3 では、次に進学する学部との連携ということで、意識付けとなる学習活動が見られた。例えば、朝の活動の流れを意識するような、「中学部や高等部では朝こういうことをやってるんだ」ということを、「同じような流れで活動してみよう」という取り組みをしてみたり、作業学習の状況を、実際に中学部、高等部に赴いて見学をしたり、実際に取り組んでみたりする活動が見られた。

「安心安全の保障」について、児童生徒の増加に伴って、既存の教室数では足りない現状が続いている、喫緊の課題として、現在も改善事項の優先順位上位になっている。令和 6 年度は、まずは玄関ホールの前に 1 教室増設することができた。和式トイレが設置されたままになっていたが、改修予算がつき、児童生徒の利用するトイレについては、洋式化が年度内に完了する見込みである。使いづらさや使用効率の部分でも大幅に改善された。教室不足を筆頭に、設備、施設の改修について、今後も実施しなければならないが、県教委や県当局と連携をしな

がら、引き続き進めてまいりたい。安全に関わる部分は、例年どおり継続して取り組んでいる。御家庭に御協力をいただきながら防災対策、あるいは「てしろもりの丘」さんにも協力をいただき、連携した防災訓練を継続して実施している。

地域関係機関との連携について、今年度から、校内組織にあった復興教育委員会を軸に、地域連携を意識しながらの学習活動に取り組んできた。復興教育と地域連携の関係性については、この学校運営協議会においても説明しているが、地域の支援学校として、復興教育のキーワードである「かかわる」を軸に、小学部は「地域を知る」、中学部は「地域とつながる」、高等部は「地域に貢献する」をテーマに、それぞれ学習活動を展開している。今年度はその取組について、視覚的に体感していただきたいと考え、「ひがしの日」に、各学部の取組をまとめた形で校内掲示をした。各学部の取り組みが視覚化され、来校いただいた方々へもアピールすることができたと思う一方で、ちょっと例えが適切ではないかもしれないが、「だんごの串」になるような、共通した学習活動がもう少し整備できればよいのではないかと感じている部分もある。これについては、新年度に向けた課題の 1 つとしても捉え、先生方ともいろいろ話し合いを進めながら取り組んでいきたいと考えている。

コロナの後に、本格的な学習活動が進んだことと、社会的に通常の生活が戻ってきたこともあって、高等部を中心に外から声が掛かる事も多くなった。近隣の工業団地からイベント参加の打診があったり、県高校野球連盟が企画する高校生マルシェというイベントに「活動しませんか」というお誘いの話があったりなど、地域とつながる機会を多く得ることができた。高等部 3 年生の進路は、現場実習の実施や支援会議等を含めて関係機関との連携を密にして様々な情報提供や配慮をいただき、早期に全員の進路を確定させることができた。また、PTA 活動では、積極的な取り組みとして、小学部における学部 PTA 行事の開催や PTA 活動終了後の茶話会など、コミュニケーションを大切にした活動が展開され、昨年度と比較して一段と積極的な活動が見られた。

「専門性の維持と向上」について、今年度から全国規模の教員研修にかかわるオンラインシステムが導入された。各研修への申し込みや研修履歴などの閲覧が個々に可能となり、教員一人一人の資質向上に向けた体制づくりが進んだ。また、校内研修会の実施や、外部への継続的な支援を行い、特別支援教育の啓発と教員の指導スキルの向上に取り組んだところである。

「業務改善の推進」について、職場の働き方改革の一環としてスタートしたオンラインによる職員会議の開催については定着し、同時にペーパーレスを進めることで会議の準備にかかる時間の縮減が進んだ。また、学校組織の意識向上に向けて、校長によるコンプライアンス宣言や職場における不祥事撲滅に向けた宣言を実施し、教職員の働く意識や規範意識の向上に努めた。組織内では、働

きやすさを意識し、相談しやすい環境づくりや雰囲気づくりを意識して、職員の気づきを受け止める職場を目指した。次年度も引き続き取り組んでいきたい。

イ 令和7年度の学校運営に向けて

資料をもとにI委員が説明

令和7年度の学校運営に向けて、基本的方針として6つの柱を立てた。この方針を本日御提案させていただき、これを基に学校経営から令和7年度の学校経営計画を考えていきたいと考えている。

まず、「学習指導要領に基づいた、教育実践の積み重ねの推進」については、学習指導要領に基づく学習活動を基本として、生活する力を育てる教育実践を継続して取り組みたいと考えている。また、子どもたちの学びに対する適切な評価を行い、子どもたちの成長を丁寧に積み重ねていきたいと考えている。

次に、「岩手の復興教育を基にした、特別支援教育としての取り組み」については、復興教育の基本的な考え方を基に、岩手の地で生きる子どもたちの将来の自立、社会参加につながっていく教育活動をイメージし、実践していきたいと考えている。

続いて、「いじめのない安心、安全な学校づくり」については、基本的な生活習慣の確立と、安心安全な学習環境をもとに、適切な人間関係の中で主体的な学習活動ができるように、学校生活全般における児童生徒の状況の把握、そして情報を共有すること、共通理解を行いながら、職員一丸となって指導、支援を行ってまいりたい。同時に、保護者や関係機関の方々と連携を密にしながら進めていきたいと考えている。

「盛岡ひがし支援学校としての地域連携のあり方の実践」についても、昨年度から取り組んできたことではあるが、地域に根差した支援学校としての役割を自覚し、学校を取り巻く地域を、職員全体で共通理解しながら学習活動を展開していきたいと考えている。新年度は、学部間連携を意識した活動が展開できるよう検討していきたい。岩手の特別支援教育が掲げる、「ともに学び、ともに育つ」という理念を大切にして、交流学習等に継続して取り組みたいと考えている。続いて、「落ち着いて学ぶことのできる学習環境の整備」については、まだまだ課題のある学校の施設設備の状況ではあるが、早期の改善につながるよう、関係当局と協議を引き続き進めていく。継続中というものもある。

最後に、「継続した業務改善の取り組み」については、新年度に向けて新たに項目を設けたところだ。情報教育の情報機器、情報ネットワークを活用した校務改善はもとよりだが、家庭や関係機関との連携においても、情報機器やソーシャルメディアを活用した取り組みが進められないか、可能なところから積極的ができるよう改善を図っていきたいと考えている。これについては、今年度もすで

にそれぞれのところで取り組めるところは取り組んでいるところだが、さらに広めることはできないか、考えていきたい。

ウ 令和7年度学校運営協議会委員について

資料5ページのとおりお願いしたい。

人事異動・改選等で変更になる場合にはお知らせいただきたい。

A委員：協議題（1）～（3）に関してまとめて、委員からご意見をお願いしたい。

C委員：いろいろな取り組み、授業などについて、良い取り組みしてるなと思って聞かせていただいた。ありがとうございます。資料3ページの「専門性の維持と向上」のところの1行目に関連して、教員研修システムの本格的導入に伴い、オンラインで申し込みや研修履歴管理ができるようになったとのことで、自己研修への取り組みの幅が広がったという説明が先ほどあった。自己研修とは、勤務時間の中での研修ということになるのか、またはいくつかある研修メニューから自分で選んで勉強できる「オンライン講座」みたいなものがあるということなのか、教えてほしい。

I委員：この研修管理システムは、Plant（プラント）という名前で、全国の教員研修がオンラインで繋がるもの。勤務時間内の研修となると子どもたちが在校中なので、実施は難しい。我々には、研修が2系統ある。1つは基本研修。例えば、教員になってすぐの初任者研修というものはもちろんあるが、その後も5年目研修、中堅教諭研修というように、基本となる研修形態が1本ある。もう1つは、自分の専門性を高める一般研修がある。例えば、生徒指導についてや、いじめについてなど、自分で高めたい分野のものを選ぶというのがある。基本研修は総合教育センターで一括管理し、年齢や経験年数によって、「この研修を受けなさい」というのがまずある。これとは別に、自分の専門性を高めるために、例えば受講しやすい夏休み中とか冬休み中の長期休業中に、興味のある講演に参加し理解を深めるとか、実践的な演習が多い研修に参加するというのが多く見られる。研修の受け方については、ほかには、勤務時間に開催される研修も当然あるので、受講する場合は学校内で調整をし、例えば出張という扱いで研修をし、研修内容については、研修報告会という形で還元している。

このシステムの大きな特徴の1つに、自分が今までどういったスキルを高めてきたかというのが、トータルしていくと、どういった力が今ついてるか、あるいは、どういった研修を多く受けてきたかが分かるような、グラフ等で分かりやす

く視覚化されるシステムである。逆に、自分が弱いところや研修が足りない分野についても視覚的に見ることができ、これについては、管理職と対話をしながら、それぞれのスキルの向上を図っていくというような形が今年度から本格的に整備をされた。よって、岩手県外の研修なども、システムと連動している研修であれば申し込んで、校内の日程等の調整が可能であれば受講できるようになっている。

C 委員：なかなか時間がない中で、なおかつ働き方改革などいろいろと言われ、よくも悪くも時間に制限がある中で、いろいろ大変なのだろうと思った。研修履歴の管理としては、管理する側はシステムを使うことがあると思うが、本人たちにとってはどうなのかと思った。今、研修履歴がグラフ化されると聞き、なかなか良いシステムだなと思った。

D 委員：資料2ページの「安心・安全の保障」の部分で、予算措置があり、トイレの洋式化が完了したというところについて、トイレの洋式化自体、整備に結構時間がかかっているのだなという印象を受けた。予算措置あってのことだとは思うが、このトイレ以外にも、進めたいが、なかなか予算が付けられないなどというところもあるものか。

I 委員：現時点で具体的なお話が出来ないところもあるが、新年度も教室改修に向けた動きはある。開校から6年を迎えて、来年度は7年目に入る。そこで大きく前進できるかなと考えている。トイレについては、県立学校全体の中では特別支援学校が整備順としては優先されている。高等学校ではまだまだ洋式化が進んでいない。本校では、次年度から、児童生徒が使うトイレは、すべて洋式となる。少しづつ前に進んでいる。

E 委員：今のトイレの話だが、支援学校への整備が一番遅いのかと思っていたが、実際には早い方と聞き驚いた。本来であれば、もうすでに全てが洋式トイレになっていなければならないと思った。今まで支援学校の現状を知らずにいた。今後は様々な場面で話題にして、いろいろな人に知ってもらいたいと思う。

F 委員：校長先生の最初の話の中で、新入生の話があった。新入生の数は、学校の定数的には多いのか、少ないのか。先生の数も含めてお聞きしたい。

I 委員：子どもたちの数については、さらに増えている。高等部は、若干募集定員より少ない希望者だった。少子化の問題があることと、進学先を様々選べる時

代になり進学のあり方が変化していることなどが考えられる。例えば、支援学校は1つの選択肢ではあるが、他には通信制の高校に行きたいとか、私立高校の中には様々な障がいに対応したような教育課程を作っている学校もあるのでそちらに進みたいなど、選択肢が増えていく中で、「特別支援学校の高等部への進学」だけを考える時代ではなくなってきている。よって高等部は、希望者がだいぶ少なくなってきた実感がある。義務教育については、市町村の就学支援委員会等で方向性が出されるので、支援学校に最初から入りたいという保護者さんがいたり、小学校や中学校に入学した後、少し考えてから特別支援学校に来ようかなという方が若干いたりする。新年度の新入生は結構増えている。盛岡だけではなく、矢巾、紫波の地区が本校に向かう地域になっている。宅地化が進んでいる地域でもあるので、これから数年はまだまだ生徒数は増えていくのだろうと捉えている。

F委員：受け入れる側としてはまだ大丈夫か。

I委員：教室不足はなかなか解消されない。先ほど教室改修の話が進んでいる件については触れたが、これは本当に嬉しい話ではあるが、今かなりぎゅうぎゅうに生徒が入ってる状態が少し薄まるぐらいの話で、教室自体に余裕があるわけではない。児童生徒が増えると、併せて教員の配置数も増やしていただけるのだが、実は職員室も手狭になっており、プライベートスペースもだんだんなくなっている。開校時のように伸び伸びとした空間での仕事というわけにはいかず、申し訳ないと思っているところもある。開校時に比べれば、職員は非常に増えた。来年度もまた教職員は増える予定だ。

G委員：資料中の「不適切な指導の根絶」について、施設側としては、虐待の問題がどうしても中心になる。先生方も「専門性の向上」に係る研修の中で、「不適切な指導の根絶」に向けて、意識を新たにしたような研修をしていかなければならないだろうから大変だと思う。また、先ほど話題になったトイレの改修についても、設備が変われば指導もまた大変だろうと想像していた。施設でも、洋式化の工事は数年前にした。改修により、トイレの利便性が向上しているので、シャワートイレなどを適切に使えば大変快適な設備だが、適切に使えるようにするための支援がまた改めて難しいと感じるところもあるので、例えば設備の半分それに合わせた使用をしていかなければならない。ご家庭の方が洋式トイレという状況は一般的であるので、学校のトイレが洋式化したからといって、学校での指導が大変だということではないかもしれないが、いずれ、環境が変わるとそれに順応する、順応していただくような支援については、先生方も大変ご苦労するのだろうなと感じた。

A 委員：おっしゃったように、もう最近家で和式トイレはほとんどないので、小学校での指導が大変だと聞いている。小学校は洋式ばかりではなく、和式が残っているところもあり、子どもたちが全然使ったことがないので、学校に入って初めて和式トイレを目にするという状況。全く使ったことがないというので、結構最初は、和式トイレの使用法についての指導が大変だという話を聞く。その点、I 委員が言ったように、全国的にはまず支援学校のトイレをしっかり洋式化するなど、設備の整備が進められているというところがある。高校はトイレの改修については、本当に遅い。大抵は学校で 1 か所だけ。最近バリアフリー化ということで、入口に段差があると必ずスロープをつけなければならぬとか、必ず多目的トイレ、車椅子でも使えるトイレを作らなければならないというのである。1 箇所はなんとかするのだが、それ以降の改修等が続かないという状況が結構ある。確かに設備が変わると子どもたちの方も、新しい環境だと慣れるまで時間がかかるなど、いろいろあるかと思う。

H 委員：高等部については別として、少子化の中で、小中学部は児童生徒が増えているのはどうしてなのか。子供が少ないので、発達障がいのお子様が増えていくのはどうしてだろうと、福祉行政に携わってからずっと感じている。まだ腑に落ちていない。盛岡の盛南エリアや矢巾・紫波という地域は、特に新しい住宅地が出来上がり、そこに人口が集中してくると、障がいをおもちのお子様が当然増えてはくるのだろうなとは思うが、これについて、我々福祉行政の中でも、どういうふうに捉えていたら良いのか考えているところだ。トイレ改修については、盛岡市の小中学校についても改修が進んでいないところがある。順次進めているわけだが、この類のことは、岩手県も盛岡市も潤沢に予算があるわけではないので、少しずつ順番に進めている。最後に、令和 7 年度からの学校運営について資料に出ているが、これまでの取り組みと変わった部分、または特徴的な部分があれば、お聞きしたい。

I 委員：「地域」について、教職員で共通理解して進めていこうという点については、去年から取り組みを始め、2 年目を迎えて継続してやってきている。大きく変わったというところがあるわけではないが、それぞれの学部で「地域」を意識した活動をしてきたものを、昨年度からは、学校として取り組んでいこうという流れを提案しながら 2 年目を迎えている。だいぶ校内では定着もしてきた。意識をしながら行事や授業に取り組んでいる先生が増えてきていると感じる。そこは大きく意識や雰囲気が変わってきたいるのかなと思う。今後はもう少し濃くしていきたいなと思っている。もう一つは、「継続した業務改善」というところで、

ネットワークや情報機器を取り入れた業務が今年は増え、変わってきてると思う。来年度はもう少し大きく、特色のあるものにしていきたい。一切を一気に変更するのではなく、職員と様々な共通理解をしながら進めたい。今年度は、例えば保護者様にお願いする学校評価のアンケートに取り入れている。今まで紙で結構な枚数のものをお願いしてたが、ソフトウェアで集約ができるように変えてみた。意外と学校現場がIT化時代の変わり目に追いついていけない。情報機器を活用したものを来年度はもう少し取り入れていくことを考えている。最近は文書にQRコードがついてきて、スマホで読み取って、報告もスマホでするような文書がくることが増えた。情報機器を活用しないと、いろいろと事が運ばない時代になってきているので、良い方向に活用できるよう業務改善を進めていきたい。

A委員：今年度のことについては、本当に様々お取り組みいただいたということで、来年度に向けてのところで、資料の「学習指導要領に基づいた、教育実践の積み重ねの推進」に関連して、次の学習指導要領に向けていよいよ中教審の審議が始まったところだ。知的障害の特別支援学校が今後どうなるかというところについて。資料には教科学習を基とする発達段階に応じた指導というのを挙げている。これに関わって、何か教育課程の変更など、新しい教育課程に向けた取り組みはしているか。

総括教務主任：毎年、教育課程の検討委員会を開いている。検討委員会の前にも、小中高、各学部で検討している。今年度は、今まで教科を合わせた指導ということで取り組んできた部分があるが、やはり合わせた指導ではなく、教科ごとに分けて、学習指導上にあるしっかりととした目標に沿った形で、一気に変えることはできないが、意識を持ちながら指導に取り組み、徐々に教科的な内容を多く出していこうという話題が出ている。

A委員：ありがとうございます。知的障害教育も、何年かごとに行ったり来たりで振り返しがある。教科が生単かというような話を、戦後から今までずっとやっている。今はまた教科重視の方に振り子が振られているというのが全国的な流れだ。そういう中で、資料中「学習指導要領に基づいた、教育実践の積み重ねの推進」の2つ目の項目では、「実際の生活場面に即した学習活動の展開」ということも挙げておられる。私は、この2つのバランスを教育課程の中でどう取るかが一番大事だと思うが、前回の教育課程の改訂から今日までの間の全国的な動きを見ていると、もう全部一旦合わせた指導をやめて、全部教科に戻したというような学校もある中で、果たしてそれが良いのかどうか、個人的にはちょっとと思ってるわけだが。ただ、なんでもかんでも合わせた指導ではダメで、系統的な国語

とか算数、いわゆる読んだり書いたりなど、積み上げの必要なものについては、単に生単でしてはいることではなく、しっかりと継続的にやることが大事なので、そこは把握した上で、しかし、この間にずっとしてきた「生活場面に即した学習活動の展開」について、知的障がいの子どもの学習特性に合わせた指導というのは大事にしつつというところで、2つのバランスをどう取るかというところだと思う。これについては、今、総括教務主任がおっしゃったように、まず学部の方でしっかりと検討した上で、それが全校で展開していくという流れだと思う。これについては、後のアンケート結果の報告でも話題として挙がっている。またコロナ禍でもこの小中高の系統的な指導をどうするかという課題は出てきており、大事なところなので、ぜひ来年度に向けてご検討いただきたい。次に、「学習評価の実施」という項目で、評価が書かれてるが、ここが一番、ある意味では難しい。評価をどうするかが難しく、当然、それぞれの学習の中で、例えば単元1つ終わったところで単元の評価をしたりとか、あるいは学期で評価をしたりとか、様々されていると思うが、例えば今までの学習評価の中で何が課題になっていて、例えば次年度に向けて、その課題に対してどう変えようと思われてるのかとか、現段階で、もしあれば教えていただきたい。

総括教務主任：評価については、評価と目標はやはり一体化していないといけないので、評価だけを改善するのではなく、評価のために目標設定のところから改善していきましょうということで、目標と評価が一体化するような方向で検討するように今取り組んでいる。

A 委員：資料の「令和6年度の学校経営について」の1つ目にある「学びの保障」のはじめに出てきた「個別の指導計画を基に～」というところで書いていただいてるが、やはり個別の教育支援計画や、個別の指導計画というものの目標と、やっぱり一日の学習の内容と評価が一体化していかなければならないと思うので、次年度も期待している。

（4）報告

ア 令和6年度地域連携 後期活動報告について

I 委員から概要を報告

前期の報告でもお示ししたが、年間を通して、地域に関わる学習活動がどのようにそれぞれの学部で展開されているかというのをまとめた。昨年度からの形を提示して、今年度に入ってから、前期はこういう活動、こういった中身でやっております、それはどういう地域に関わっている学習活動だというようなものをお示

ししたが、それの後期版ということで、各学部でまとめた。それぞれの子どもたちの小中高の実態、各学部で目指す力、育てたい力はそれぞれ違うので、各学部で育てたい力を土台にしながら、各学部で学習活動が展開されてきた。

それぞれの学部で関わる地域について、それぞれ学部主事に振り分けてもらい、資料の図にしている。例えば、中学部や高等部のように、学校の外にいろいろ目を向けていくというような段階の学部については、従来の校内だけでいろいろ活動を広げていくというよりは、外に向けて、外とどうつながるかというような学習活動なども入ってきている。これは前期、後期ともにであるが、これが特徴的なところだと考えている。高等部は、進路学習が、現実味を帯びてくるので、進路学習に関わった取り組みも入ってきている。各学部主事から説明をし、具体的な様子等を紹介する。

各学部主事からの説明

資料のとおり

イ 令和6年度学校評価アンケート結果について
資料7~14ページのとおり、副校長が説明。

ウ 令和6年度いじめアンケート結果について
資料15ページのとおり、副校長が説明。

A委員：「令和6年度地域連携後期活動報告」「令和6年度学校評価アンケート結果」「令和6年度いじめアンケート結果」の3つについて、まとめて報告していただいた。ご質問、ご意見はございませんか。皆様から無ければ、私から気になったところを1つ。学校評価アンケートの資料7ページのQ4とQ5のところだ。学部間の比較でも、Q4は小学部が低く、Q5方は高等部だけ高いというところ。10ページに教職員アンケートの詳細がグラフで示されているところを見ると、Q4は小学部が91.1%で、中学部と高等部は100%。Q5は小学部93.3%、中学部91.3%、高等部が100%なので、確かに小学部が低いとか言えば低い。なぜこういう結果になったと思うか。グラフの下の分析には、「児童生徒の発達段階が影響している」のが要因として考えられると書いているが。

副校長：予想されるところとして、例えば「将来に必要な」という文言が質問紙にあった場合、担当している児童生徒が小学部であった場合は、「将来に必要な」について回答を求められると、少し評価が下がるのかなということが、影響しているのではないかと分析した。

A 委員：そういうことであれば、進路指導について質問するのではなく、アンケートの文言の工夫が必要だ。高等部だと卒業後の進路指導というのは身近に感じるが、小学部で進路指導と言われても回答が難しくなるのではないか。今は、キャリア教育という考え方で、狭い意味での進路指導ではなく、自分で役割を果しながら、自分で自分らしい生活を作っていくというためのキャリア教育ということを言われてる。今までの進路指導は、小中はあまり関係なく、高等部でやるものだというようなところもあったが。来年度の「学校運営に向けて」の方針のところで I 委員が、「岩手版キャリア教育」という言葉を出されているとおり、将来の自立と社会参加を目指す視点からの教育活動ということで言えば、進路指導と聞いてしまうと、どうしても先生によっては認識にずれが出てくると思う。当然、小学部で実践している様々な活動も、キャリア教育という視点から捉えれば、将来の自立とか社会参加に向けてということで取り組んでいることなので、私は、どうしてこういうアンケート結果が出たかというのは、児童生徒の発達段階の問題はもちろんだが、質問のし方に工夫が必要だったと思う。またご検討いただきたい。

（5）その他

ア 高等部 3 年生の進路先一覧

資料のとおり

A 委員：先ほどのところで H 委員もおっしゃっていたが、どうして障がいのある子どもが増えるのか、支援対象の子どもが増えるのかという話だが、厚労省から知的障がいの子どもの数が増えているという発表が去年あった。手帳の発行件数のことだが、増えている。日本では、福祉サービスを受けようと思ったら、手帳を取らないと福祉サービスを受けられないので、どうしても何らかの福祉サービスを受けようと思うと手帳を申請していくことになると、手帳の種類がなかなか障がいの実態に合っていないという問題もある。特に知的障がいとか発達障がいのお子様がなかなか難しいところだ。発達障がいで、知的障がいの面では問題はないが、生活上いろいろな場面で困難さがあるというお子様に何らかの福祉サービスを受けさせたいとなると、やはり手帳が必要だということになる。手帳を発行する時の基準が、昔よりはこれでもだいぶ実態に即してきたのではないかと思うが、出せるのが精神障害者保健福祉手帳か知的障がいの療育手帳しかないので、どちらかに該当させなければならないというところでなかなか大変かと思うのだが、なかなか難しい。ありがとうございます。本当にご苦労様でございました。

C 委員：本当に担当の先生にはご苦労されて、本當によくやっていた。本当に感謝感謝である。どうしても入所施設に籍がある生徒は、グループホームに入れれば良いのだろうが、なかなかそうもいかない。受け入れる施設側も、出す施設側にも課題はある。うちは、相談支援事業所もしているが、相談には「グループホーム新規開拓しました」ということで結構来るが、本当に大丈夫なのかなと。中軽度の人たちだったら良いかもしれないが、重度の人たちを本当に見てくれるのかなと思うと、お互いに情報共有を深めてからでないと頼めないのかなと思っている。

A 委員：特に強度行動障害の方の受け入れ先がなかなかないという問題は難しい。保護者は高齢化していくし、受け入れ先はないしでなかなか大変だというのを、テレビのドキュメント番組で見た。私もずっと長く高等部で指導をしていた経験があるので、本当に進路指導の大変さというのは分かる。進路指導主事の先生を中心に、高等部の該当学年の先生方には様々ご苦労いただいたかと思う。

（6）委員の皆様から

C 委員：学校現場はあつという間に1年が回ってしまう。その中でいろいろな工夫をし、なおかつこれが目に見えるような形で頑張っていただいているということに対して、本当に感謝している。

E 委員：毎年、着実に前に進んでいると感じている。先生方の努力と、委員の皆様のご協力で、本当に前に進んでいるなというのが、今日の感想だ。

F 委員：今度、この地域の役員改選があり、来年は新しい人が委員になると思う。これまで2年間、本当にありがとうございました。コロナも明けて、学校の皆様ともこうやってお付き合いできて本当によかった。今後とも、この地域と一緒にになって、子どもたちのためにと思っている。後任にもよろしく言っておく。今後ともよろしくお願ひしたい。

G 委員：昨年初めて「ひがしの日」にお邪魔し、すごく生き生きと生徒たちが活動されてるなど拝見させていただいた。ちょうどどちらの卒業生も一緒に行きたいということと一緒に来た。本当に、生き生き学校生活を送ってるところを目の当たりできたので、本当に良かった。来年度も期待している。

H 委員：今年度、高等部の皆さんで、一般就労に繋がった方はいらっしゃらないが、最終的には福祉サービスに全員繋がったとのこと。先生方がそれぞれ違った個性をもつたお子様たちに、それぞれ寄り添ったおかげで、次のステップに繋がったと思う。引き続きよろしくお願ひしたい。

I 委員：本当に今日はお忙しい中、本校の学校運営協議会、コミュニティスクールに来ていただき、本当にありがとうございました。本当に様々なご意見等を聞いて、来年度に向けて体制づくりを進めていく上で参考にしたいことをたくさんいただきました。学校経営はなかなか私自身も日頃から難しさを感じてはいるところだが、子どもたちをどう育てていくかというのは変わらないわけだが、学校は、その時その時の時代の波に乗りながら、それでも変えてはいけない、普遍的な、変えてはいけない教育としてのあり方というのもきちんとちながら前に進んでいかなければいけない。そこをどういうふうにバランスをとっていくか。あまり先進的なことを取り入れて、やろうやろうと言ってやりすぎても、なかなか息が上がってきてしまう。難しいものだなと思っている。さて、このコミュニティスクールがスタートして2年目に入った。少しずつだが地道に進んでいくことの大切さというのを改めて感じた。またこれらのことと次にどう引き継いでいくか。息の長い、地道にだが前に進んでいく学校経営というものが見えてくるのではないかと思っている。本校は今年度6年目を迎えてると、いろいろなところで話してきたが、新年度はいよいよ7年目に入る。我々の業界では、6年目をおおよその該当基準ということで、開校当時にいた職員が異動していく年になってくる。該当の職員全員が異動するわけではないが、いずれこの6年、7年、8年のあたりが、ゼロからスタートした盛岡ひがしの第2幕と言うか、第2ステージに上がって変化していく数年になるのではないかと思っている。皆様におかれましても、やはり学校全体の変容する姿を見ていただき、「私はこういうふうに見えるよ」、「私はこういうふうに感じているよ」というようなことを、その都度ご意見等いただきながら、もっとこういうふうな形にしてみたらいいのではないかなど、引き続き私どもにメッセージとして送っていただきたいなと思っている。新年度も学校運営協議会の委員を引き受けていただけるということで、大変ありがとうございます。お役職が変わられる方はもちろんいるわけだが、本校に関わっていただいたことを、ぜひこれからもご縁としていただき、引き続きご協力を願いしたいと考えている。

(7) 閉会